

# 『世界議会：21世紀の統治と民主主義』解説

横浜市立大学国際教養学部

上村 雄彦

現在、ウクライナやパレスチナにおいて戦争が起こっていることは誰もが知っている。しかし、世界全体を見渡せば、およそ50カ国で戦争や紛争が勃発しており、終結する兆しは見えない。地球温暖化は専門家が気候危機と呼び方を変えるほど深刻であり、地球の平均気温が産業革命に比して越えてはならない1.5度を、2030年にも越える見通しである。格差は拡大し、世界の飢餓人口は8億人近くに上る。コロナよりも感染力が強く、致死率の高い遺伝子組み換えウイルスを作るとは可能だし、サイバー攻撃によって核兵器のボタンが押されたり、原子力発電所の電源が切断される可能性もある。AIの暴走の可能性も指摘されている。つまり、現在は地球規模課題の深刻化を乗り越えて、人類生存危機の時代に突入しているのである。

その解決に向けて、各国、G7、G20、国連、NGOなどが懸命な努力を続けているが、解決の目途は立っていない。それはなぜなのか？ その答えは、現在の国際社会が「コモنزの悲劇」と同じ構造になっているからである。つまり、それぞれの羊飼いが各々の羊に目一杯牧草を食べさせようとして競合しているうちに、牧草地というコモنزが荒廃し、羊も羊飼いの全滅してしまうという状況に、各国が陥っているのである。コモنزの悲劇を避けるためには、コモنزの参加者を管理する権限を持った調整人が必要である。国際社会に当てはめると、各国の主権を超えた調整役が必要である。その役割を正統性をもって果たすのが世界議会である。

世界議会は、各国の国益を代表する上院に加えて、国益を超えた地球益を代表する下院から構成される。そのことにより、これまで地球レベルの事柄には全く声を反映させることのできなかつた市井の人々が、自分たちの想いを届けることのできる仕組みができあがる。これこそが、透明性も、民主性も、説明責任もない現在のグローバル・ガバナンスを改革し、地球レベルで民主主義を確立することを可能にし、その仕組みをもって危機的な地球規模課題を解決するのである。すなわち、世界議会は、地球規模課題を解決するための最後の切り札と言ってもよいだろう。

しかしながら、このような大きな可能性を持つ世界議会構想は日本において全く知られていない。そこで、本書は世界議会という有望な構想を広く知らしめ、現在の危機的な状況乗り越える手立てはあるのだという希望を与え、世界議会実現に向けての具体的な議論が開始される契機を作ることを目的として刊行されるものである。

本書は、Leinen, Jo and Andreas Bummel (2018) *A World Parliament: Governance and Democracy in the 21st Century*, Berlin: Democracy Without Borders の翻訳書である。著者のヨー・ライネンは、執筆当時欧州議会議員で環境グループに所属し、欧州議会で環境政策

をリードするキーパーソンであった。もう一人の著者であるアンドレアス・ブメルは国境なき民主主義というドイツに本部を置く NGO の事務局長を務め、本書の主題である世界議会の実現に日々奔走している。

彼らによって執筆された本書は、悪化する地球環境破壊、拡大する格差・貧困問題、終わりなき戦争・紛争、感染症の脅威など、さまざまな地球規模課題を解決するためには、現在の主権国家体制や国際機関では全く不十分であることを浮き彫りにし、新たなグローバルな政治組織、すなわち世界議会の創設を提唱するものである。

具体的には、世界議会構想の歴史と先駆者たちを考察した第一部、さまざまな地球規模課題の現状の対策とその限界を浮き彫りにし、オルタナティブを探求する第二部、そして、世界議会の具体的な制度設計と実現への道筋を提示する第三部から構成される。

第一部では、古代ギリシャのコスモポリタニズム（世界市民主義）から、カント、ホッブズ、ロック、フランス革命、18世紀の啓蒙主義や議会主義、第一次大戦と国際連盟の創設、第二次世界大戦と国際連合の創設、NGOの台頭、グローバル化時代の民主主義に至るまで、世界議会の構想と先駆者たちについて歴史的かつ哲学的に分析し、国連議員総会の必要性を提示している。第一部で読者は世界議会についての長い歴史を辿る旅を楽しんでいただけることだろう。

そして、読者は現代に辿り着き、地球社会がどのような問題に直面しているか、そして現在これらに対してどのような議論がされているかを知ることとなる。具体的には第二部は、核兵器、テロ、食糧安全保障、飢餓、世界の水問題、格差と貧困などの地球問題の現状から、金融危機、租税回避などの金融問題、人工知能の発展を含む急速な技術開発まで幅広くカバーし、それらに対する政策の限界を論じている。その上で、現存の政策に代わるオルタナティブや世界政府論を吟味しつつ、グローバルなレベルでの民主主義、地球市民意識を涵養するための新たなグローバル啓発運動などを検討している。

そして、読者はこれらを踏まえた上で、どのような未来が可能なのかを学ぶ。それを扱う第三部では、グローバル民主主義を実現するための制度設計として、世界議会の創設と世界法の制定、これらが可能となる必要条件について論じ、希望ある未来を描いている。

筆者たちは「私たちの目的は、世界議会と世界法秩序の課題にスポットライトを当て、これらについて真剣な議論を引き起こすことである」と述べているが、日本において全く知られていない世界議会という構想を、まさに本書を通じて初めて広く知らしめ、現在の危機的な状況を乗り越える具体的手立てとしての世界議会をよく理解し、その実現に向けての具体的な議論が開始される契機となることを願うものである。

その背景には、世界広しといえども、『世界議会』と題した書籍が一冊もないことが挙げられる。研究論文レベルではいくつか存在するものの、その数は限られており、また一般向けに書かれているものでもない。そのような中、学術的な水準を十分に保ちながら、一般読者にも読むことが可能で、しかも日本語訳になっている本書の意義は大きいと思われる。とりわけ、既述のとおり、世界議会は地球規模課題が人類の生存危機と呼ばれるまで深刻化し、

その解決が全く見えない現在、解決策となりうる構想であり、グローバルなレベルで民主主義を確立して、私たちの声を届けることのできる有効な手段なのである。これが幅広く知られ、議論のきっかけを作ることができれば、それこそ本書の大きな意義となるであろう。

最後に、監訳者がどのようにして本書と出会い、そして翻訳プロジェクトが始まるに至ったのかということについて、触れさせていただきたい。監訳者は2017年秋からサバティカル（在外研究）で、最初の半年はスイスのジュネーブで、残りの半年はフィンランドの首都ヘルシンキにあるヘルシンキ大学政治学部で研究生活を送る幸運に恵まれた。ヘルシンキ大学に在籍しているときに、同僚のヘイッキ・パトマキ教授に「この本はもう読んだか？」と見せられた本が本書の英語版であった。早速購入し、毎晩寝る前に読むのが日課となったが、とてもよく書けていて、毎日夜が来るのが楽しみなほどであった。

その後、2018年7月に、世界連邦の創設を目指すNGOである世界連邦運動協会の世界大会がオランダのハーグであり、ヨーロッパに滞在している地の利を生かし、大会に参加したのであるが、なんとそこには『世界議会』の二人の著者も参加していたのである。ちょうどこの本を携帯していたので、直筆のサインをもらいつつ、この本をめぐる様々な話をするといい機会に恵まれた。これが縁で、その後、ブメル氏が事務局長を務める国境なき民主主義のアドバイザーに任命していただき、現在に至っている。

そのような経緯もあり、いつかこの本を翻訳して、日本の読者に紹介できればと考えていたところ、またもや偶然にも今度は翻訳者の一人である横江信義さんから、「この本の翻訳を考えていて、世界連邦運動協会に連絡をしたところ、上村先生を紹介された」との連絡が入り、この翻訳プロジェクトがスタートすることとなったわけである。

翻訳チームの立ち上げから、今日に至るまでの苦勞の数々は、「あとがき」に記されているとおりであるが、まずもって計り知れない苦勞を積み重ね、最後まで翻訳をやり遂げた横江信義さん、原田雄一郎さんを中心とする『世界議会』翻訳チームのみなさんに、心から敬意と感謝を申し上げたい。次に、昨今の出版業界が厳しい折、本書を快く刊行することを承諾してくださった明石書店の大江通雅社長、そして、大江社長を紹介してくださった宇都宮大学の重田康弘名誉教授に感謝したい。本書を知ることとなったのはヘルシンキ大学のヘイッキ・パトマキ教授のおかげであるし、著者で友人であるアンドレアス・ブメル氏、ヨーライネン氏にも、素晴らしい本を書いてくれてありがとうと伝えたい。

最後に、本書は横浜市立大学学術研究会の出版助成により、日の目を見ることができた。同研究会会長の鞠重鎬教授を始めとする研究会のみなさまにもこの場を借りて深謝を申し上げたい。

現在私たちは危機の時代に生きている。この危機の時代にあって、本書が希望の一筋の光になることを祈念して、解説のむすびとしたい。

秋風がそよぐ研究室にて  
上村 雄彦